

Book Review

TCH マネジメントと リハビリトレーニングで治す顎関節症 日本発木野メソッドによるアプローチ

木野孔司 編著
佐藤文明・儀武啓幸・和気裕之 著
Nguyen Gia Kieu Ngan 監訳

● ● ●

Reviewer

小林 馨 Kaoru Kobayashi

(鶴見大学歯学部口腔顎顔面放射線・画像診断学講座)

A4 判変、88 頁
定価 (本体 4,500 円+税)
医歯薬出版刊



ご紹介いただいた患者さんの顎関節症の診断・治療・管理に従事している私にとって、自分の臨床を助け、再考する1冊でした。以下にそのように感じた点を記します。

・オリンピックに向けて日本語・英語を並記

本書を手にしてまず目につくのは日本語と英語が並記されていることです。来年のオリンピックのみならず外国からの訪問者が増加し、少なくとも英語での対応が求められている現在では有効な書籍であると思います。特に、医療面接については、発達してきた翻訳ソフト（アプリ）でも表現が難しいことがあり、さらに精神医学的医療面接を取り上げているので、誰にでも参考になると思います。これに応じた顎関節症初診時質問票、精神医学的面接質問票、生活・行動要因調査票も日本語・英語並記で添付されており日常臨床に活用できるでしょう。

・初診から治療終了までがわかる

1冊の書籍で患者さんの初診から治療終了までを知ることができます。これは、表題とした木野メソッドを効果

的に行うための方法を、多くの人ができるように考えられたもので、この流れに沿って、医療面接→顎関節症の診察・検査→診断→顎関節症の病態治療→顎関節症の病因診断→顎関節症の病因治療→治療終了時の患者指導と再発時の対応→木野メソッドによる治療例と進んでいくので、診療の流れが理解しやすいと感じました。ただし、病態診断と病因診断、病態治療と病因治療はそれぞれ並行して行われますが、この点は治療例を見ながら再確認すればより理解につながると考えられます。

・他の歯科治療などの開始時期が書かれている

顎関節症の治療が終了したら、どのようにして再発を防止するのも書かれています。そして、歯科医師なら誰もが考える、咬合に関連する治療開始の時期をいつにするかです。顎関節症の治療が奏功しても、歯科治療が必要な状態が残っているのは、日常臨床でよくあることです。そのための治療の開始時期について記載されています。「(咬合)治療を急がない姿勢が重要である」は私も同感です。

そしてここでは、顎関節症再発時の

対応も述べられています。これまで再発時の対応が記述されたことは少ないように思います。しかし、私の臨床経験では、時に再発して再来する患者さんがいらっしゃいます。本書ではそのような患者さんに対し、本書の付録の生活・行動要因調査を用いた例が紹介されています。この方法は臨床の一助になると考えられます。

・“かくれ顎関節症”に咬合違和感を併発

「どこで咬んだらいいかわからない」という例の紹介です。臨床でとても困る症例です。治っていない顎関節症がさまざまな症状を呈しますが、TCH是正訓練とリハビリトレーニングに効果がある例も示しています。臨床における参考になるのではないのでしょうか。

最後に、私の立場からは画像診断の必要性の記述が少ないことが残念でした。顎関節疾患には画像診断は必要不可欠なものです。“どのような症例でどのような画像検査・診断が必要か”があれば、さらに理解しやすくなったと思います。